

オープン
フォーラム

報告 平成29年度自然災害 に関するオープンフォーラム 「後世に遺す ～未来を守る 防災教育～」

松田 曜子¹

1. 概要

本年のオープンフォーラムは「後世に遺す～未来を守る防災教育～」というテーマで実施された。防災教育は、単純な災害対応技術の伝達から、生きる力の涵養や、地域社会への理解などより根元的な目的を持った教育へと移り変わってきている。中越地域では新潟県中越地震以降の復興の様子を「メモリアル回廊」というしかけを通して公開している。震災遺構やアーカイブ施設も運営の方法によりそのような理解を助ける教材となることが予想される。本フォーラムでは、アーカイブや防災教育に様々な立場から関わっている方々を招き、「遺す」ことをどう防災教育につなげていくかを考えることとした。また、実際にフォーラムのパネリストでもあった地元の方の案内で中越メモリアル回廊を巡るエクスカーションも実施した。

日時：2017年9月29日（金）

9：30～12：30 オープンフォーラム

13：30～18：00 エクスカーション

（中越メモリアル回廊）

場所：長岡震災アーカイブセンターきおくみらい

【登壇者】

山内宏泰氏

リアス・アーク美術館・学芸係長（津波 / 気仙沼）

北野 央氏

仙台市市民文化事業団・主事（地震・津波 / 仙台）

諏訪清二氏

兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科・特任教授（地震 / 神戸）

米山正幸氏

北淡震災記念公園・総支配人（地震 / 淡路島）

崎山光一氏

稲むらの火の館・館長（津波 / 和歌山県）

樋口 勲氏

ラブリバーネット・代表（水害 / 大河津分水）

松井智美氏

震災復興交流館郷見庵・運営管理責任者（地震 / 中越）

山崎麻里子氏

長岡震災アーカイブセンター・マネージャー（地震 / 中越）

コメンテーター：北原糸子氏

（立命館大学

歴史都市防災研究所 研究員）

コーディネーター：上村靖司・松田曜子

（長岡技術科学大学）

¹ 長岡技術科学大学環境社会基盤工学専攻・准教授

2. 討論要約

(1) 何を遺そうとしているか

上村: まずはパネリストの皆さんに自己紹介を兼ねて、何を遺そうとしている方なのか、ご紹介いただければと思います。

山内: 山内です。リアス・アーク美術館というのが宮城県の気仙沼市にありまして、主に現代美術を紹介している美術館です。それと同時に、当館は地域密着型といわれていますが、東北・北海道の地域文化や地域独自のものを調査研究、展示しています。平成23年の東日本大震災では地震のため1年半にわたり完全休館し、修繕をして平成25年4月から完全再開しました。その後、「東日本大震災の記録と津波の災害史」常設展示を新設公開して現在に至っています。この資料のすべてがわれわれ学芸員による独自の取材、撮影、収集による資料展示です。被災現場写真、被災物、災害史関連の資料などの資料総数が大体500点ということになります。発災から2年で、現地でこういった施設を開くのは恐らく前例がないと思いますが、復旧、復興ということに対して必要な資料をいち早く提供する必要があるということで急いで作りました。

北野: 仙台市市民文化事業団の北野と申します。市民文化事業団は、せんだいメディアテークや3.11メモリアル交流館など、仙台市内にある9つの文化施設を指定管理しています。私は今年4月の異動により総務課企画調整係になりました。現在はその新たな職場で震災から10年目にあたる2021年に向けて、震災に関わる事業ができないかを検討・準備しています。今日は、3月まで所属していたせんだいメディアテークの活動についてご紹介します。せんだいメディアテークは、生涯学習施設で市民が主体的に記録する活動が学びになると捉え、震災や民話、写真、音楽などの地域文化について市民による記録と利活用の活動をサポートしています。

この市民の記録活動をうしろ支えする中で、海

外では「コミュニティアーカイブ」という名前です。その土地に住む人やあるコミュニティに属する人びとなど、当事者自身がつくるアーカイブがあることを知りました。せんだいメディアテークでやっていたことも、これだと思いましたが、全てカタカナだとわかりにくいので「草アーカイブ」と名付けました。「草アーカイブ」は、プロ野球と草野球のように、うまい下手にかかわらず、プロのアーティストも市民もスタッフもかかわって、草野球的に楽しみながらつくるアーカイブ活動を日常的な文化活動としてできないかと取り組んできました。

草アーカイブの役割

「一人ひとり」が見聞きした小さな記録（物語）づくり

- ・プラットフォーム
- ・主観的な視点で断片的な記録でも、そのひとりの意志により公に残す
- ・誰が見てもそうであるような（客観的な）リアリティ/現実よりも、人の数だけ存在するような（主観的な）アクチュアリティ/現実を大切に
- ・小さな主体/個人による記録が他の個人が震災を考える参照点になる、その点の存在を担保
- ・その複数の主体による、複数の参照点が、他者にとって震災のとらえ方の違いを許容する余白に
- ・それらを集積することで人びとがどのような動きをしたか残す

参加型展示「はじまりのごはん」 (協働：3.11オモイデアーカイブ)



諏訪: 諏訪と申します。肩書は県立大学で特任教授となっていますけれども、今は自分のことを防災学習アドバイザー、コラボレーターと呼んでいます。以前は、兵庫県立舞子高校の環境防災科で教えていました。舞子高校では、学校に語り部を呼び、子どもたちに震災体験を聞いてもらうということを行ってきたのですが、一つだけ、子どもが見えてこないことに違和感がありました。そこで「自分の子どもの頃の震災体験を文章で残す」という取り組みを始めました。そこには何も教訓めいた話は出てこないのですが、震災の中の子どもの戸惑いが書かれています。例えば、お父ちゃんを3歳のときに亡くした女の子が、何が寂しかった、お母ちゃんとお兄ちゃんが、「お父ちゃんて甘いもの好きやったね」という話を始めるときに、自分には甘いもんを食べているお父ちゃんの記憶がない、それが一番つらい、という話をします。こんな話を聞くと、聞く側は教訓というよ

りも戸惑いを感じると思うんですけども、そういった戸惑いを感じるような語りを残していきたいと思っています。僕は箱物も場所もないが、それに関係なく、子どもたちが子どもとして感じた体験を残していく仕事をしたいと思っています。

米山：北淡震災記念公園野島断層保存館の米山正幸といいます。当館は22年前の兵庫県南部地震で地表に現れた野島断層をそのまま屋根をかぶせて保存している施設です。平成16年には震災体験館を建て、阪神・淡路大震災の揺れに加え東日本大震災や南海トラフの巨大地震のような、津波が怖い大きな横揺れを体験できるようになりました。それと、震災記念公園のオープンには地震の3年後(平成10年)だったのですが、そのオープン当初からどうしても体験談が聞きたいという要望がありまして、震災の語り部を始めました。最近では特に防災、減災学習のために県外派遣にも出かけています。

上村：北原先生、何かコメントはいかがでしょうか。

北原：「防災教育」って名前、申し訳ないんだけどあまり好きじゃなくて、でも、諏訪さんが言ったようにそれがもしその人々の「戸惑い」っていうところに突き当たるのであれば、これはすごく行き着いた一つの段階ではないかと思いました。

諏訪：「戸惑う」という言葉、僕もとっても大好きであちこちで使っていますが、これを最初に言いたしたのは高校生です。東日本大震災の後に、兵庫県のある高校生が「自分は防災一生懸命勉強したから、東松島に来て自分は何かできる、絶対役に立つと思った。実際に見ていたら何もできないような気がする、できたのか、できてないのかな、そこが何か戸惑うんや」みたいな話したとき僕、感動して、その子に「戸惑い」をちょっとパクっていい？と聞いて使わせてもらいました。その言葉を自分がしてきたことに照らし合わせて見たら、何のことはない、現実ぶつけて戸惑わせる

ことばかりやってきたのかな。例えば、子どもを被災地に連れて行ってボランティアするのも目的は支援だけど、子どもたちはいろいろ戸惑って帰ってくるわけですね。どうもその戸惑っているのが学びの原動力になっていると思ったんです。それからあちこちで使わせてもらっています。

上村：ありがとうございます。後半の4名からもお話を聞きたいと思います。

崎山：和歌山県にあります稲むらの火の館の崎山と申します。私は今から163年前の津波のことをずっと語り継いでいるのですが、もちろん私を含めて周囲には誰も体験した人はいません。これが去年の津浪祭ですけども、114回目になりました。そして、この写真ちょっとご覧いただいたら、通常こういう大きな町の催しでは、来賓の方が正面にいらっしゃると思うんですけども、一番真ん中にいるのが小学生、中学生で子どもたちをメインにしたお祭りになっています。そして、最後に町長が子どもたちに、「とにかく君らはこの町で生まれて育ったっていうことを誇りにして、そして大人になっても防災っていうことだけは忘れることのないように」という話をします。ともかく知らない時代の災害ですけども、こういう催しも含めて私の町では津波防災を伝えていると思っています。



樋口：Love River Netの樋口と申します。大河津分水というところで活動しています。大河津分水は、100年ほど前、水害が多発していたこの地域に掘られた約10キロメートルの人工の川です。こ

れができたことにより色々な恩恵がありました。水害が激減し、日本一の米どころが誕生し、さらに越後平野の真ん中に高速道路や新幹線が通りました。そのような大きな恩恵を与えている大河津分水ですけども、簡単には完成していません。その歴史や恵みを紹介しているのが、信濃川大河津資料館です。ここを活動拠点に、先人の思いを遺す活動をしています。



松井：山古志木籠集落・震災復興交流館「郷見庵」を運営しております松井智美と申します。私たちの地域は、震災により村を流れる芋川が土砂崩れによってせき止められ、集落が水没する被害に遭いました。写真にあるように、家屋を震災遺構にすることが決定し、去年の秋補修工事が完成しました。その近くに郷見庵という交流施設を建てて、1階は直売所、2階には村の資料や地震の写真などを展示し、交流を深める場所として生かしています。震災から3年がたち帰村したときには、本当に村の存続が危ぶまれました。人口も半減して高齢化も進む中、伝統の文化の継承や村の行事を行うことが困難になりました。そういうときに外部からの支援者、ボランティアの人たちや村を離れてもまだこちらに通ってくる住民と一緒に、山古志木籠ふるさと会という会を設立して、住民と一緒に木籠集落を心のふるさとになるように活動しています。毎月のようにイベントをして生きがいや楽しみを生み出し、人と人とのきずなを大切に日々運営しております。



山崎：長岡震災アーカイブセンターの山崎と申します。中越メモリアル回廊は、中越地震の被災地全体をアーカイブして震災をきちんと伝えていくためにつくられた施設、地域、場所になっています。大きな目的は、やはり「震災で学んだこと、知見、教訓を伝えていく」ということですが、知的観光拠点としていろんな方の興味を持ってもらい、学びながら、また中越地域の魅力も同時に感じてほしい、学術的な学びだけではなく、その地域の魅力も一緒に感じていただきたいというような見せ方で取り組んでいます。また、「地域の持続可能性」という言葉がありますが、震災で人口がどんどん減っていくこの中山間地域の中でも、やはりその地域で生活を続けていきたいという方がこの中越地域にはたくさんいらっしゃいますので、そういった地域を今後どのように持続させていくかということを、今後一緒に考えていきたい、メモリアル施設もその役割を担えたらと考えてきました。

上村：糸子先生、後半の4名についてもお気づきのことがあればお願いします。

北原：最初の稲むらの火の館は大変有名です。114年お祭りを続けていくのも大変でしょうけれども、100年間続くということはいろいろぐり抜けてきた波があったんじゃないか。資金の問題も人の問題もあるでしょうけれども、その辺のご苦労をお伺いしたいと思います。それから、松井さんに関してはご自身のことをご説明なさらないので、残念なんですけども(笑)、松井さんのお宅

は水に浸かっちゃって、何かご説明されるのかなと思ってただけど、やっぱりその体験が郷見庵にずっとかかわっていこうという思いの中心ではないかなって。

上村: 順番にいきたいと思いますけど、崎山さん、いかがでしょうか。100年続いてきて危機はありましたか？

崎山: 多分あんまり100年続くのに苦労してないと思うんです。というのは、昭和10年代の堤防を修復する場面がありましたが、土の固まりですから毎年雨で流されて、それを元どおりにするのが村の一つの年中行事であったと思います。津浪祭の1回目は明治36年、安政津波から50回忌に始まっているんです。大きな災害でも50年たてばみんな忘れてしまうものですが、この話の中心には濱口梧陵さんという偉大な人がいて、「私財を投げ打って次の津波に備えて堤防を作ってくれた」という物語があった。村人みんなが自分の命を守る手段としてこの堤防の修復作業に参加してきたがために、ずっと続けているのだらうという気持ちを持っています。



昭和10年代堤防修復活動

上村: 堤防の修復作業は最初の津波のときからもう始まっていて、その50年後にお祭りが始まる時には既に年中行事化していたということですね。さて松井さん、確かにご自身のことを紹介していませんでしたね。

松井: 写真(注:前頁参照)では奥手のクレーン

の隣が私のおうちだったんです。前は雪が降ると車を持って村の中まで入れないような、そんな山奥だったんです。その後一本道が開けてやっと除雪車が入るようになって村がちよっとよくなった、そんなときに地震が起きたんですね。なので、写真の手前のおうちは16年の4月に家を新築して10月に地震。私の家も2年しか住んでないようなおうちなんです。手前のおうちは修復してきれいになっていますが、私のおうちは手はつけずにそのまま保存されています。あの家を建てるときも、すごい山の奥から丸太を、重機が入らないので雪の上を引っ張って持ってきて、それを柱にした。そのおかげなのか、水に浸かっても毎年毎年3メートルの雪が降る中でもつぶれない。これでやっぱり震災遺構にしようということになりました。当初、この保存が決定する前は残さない方向だと聞いていました。けれど、これがあるからこの村は生きるんだよっていう、その訴えが何とか叶って、去年秋、修復工事をして、またこれを震災遺構にしましょう、未来に伝えましょうという感じになっています。

(2) 遺すことの難しさ

上村: それでは、後半戦に突入していきたいと思っています。今度は「遺す」に当たっての難しさ、課題を教えてください。

山内: 私、気仙沼市の「災害震災伝承検討〜」とか、「震災遺構保存〜」とか、多くの委員を務めています。それで、いわゆる遺構というものの問題は、例えば気仙沼だと有名になった船がありましたが、あれが撤去されていく過程は人間の業といえますか、私には汚いものしか見えなかった世界でした。遺構が残されるというときに、人間の汚さばかりが見えるのはなぜだろうという思いを今でも持っています。何かもっと美しくそれをしていく精神はないのだろうかと思っちゃいます。今、東日本で遺構として有名なものは、大概なにがしかの商売と関係していることが多いです。私はそれを全否定するつもりはないです。人

が動くということ自体はよいことです。ただ、どうも商売というところにだけを強化してしまうと、恐らく長くは残らないだろう、やはり教育という関与の中に持っていけないといけないと思います。例えば100年という間隔で考えると、やはり「教訓を伝えていくためのもの」として遺構が必要だというわかりやすい構図が必要なのではないか。

表現物という意味では、『稲むらの火』なんて紙芝居にもなっているし、アニメ映画みたいなものにもなっていたり、ラフカディオ・ハーンというきちんとした作家が関わっていたりとか、いろんなことがあるので、ネタが尽きずにずっと続けられるんですよ。そういうかたちに何か作っていないと、残すということは難しいんじゃないかと思う。だから「ストーリーが伴わない遺構は残らない」ということですね。山古志も「ここ私の家なんですよ」というストーリーがあるからこそ、われわれはあれを変な土に埋まった家とは見ないわけですよ。何か大切なものとして見る理由というのは、背景にそのストーリーがあるからということなので、大事なものはではなくてストーリーのほうだと私は思います。

北野：さまざまな団体が、デジタルアーカイブについてのシンポジウムを開催するときに、「活用」をテーマにすることがありますが、その多くが、施設職員や大学の先生のような専門家がつくった記録があり、その後、市民を含む利用者がどのように使うかという議論が多いと思います。特に、震災に関しては、被災したのは専門家だけでなく、市民自らも被災者であり、現代ではスマートフォンやパソコン等が普及し、誰もが写真や映像などの記録を残し、それらをSNSやインターネットで発信できます。したがって、やろうと思えば、簡易なアーカイブ活動は誰でもができるはず。そのため、施設や自治体のアーカイブでも、その記録や活用のさまざまなプロセスに市民も含めた、多様な主体が関わることが重要なんじゃないかと思います。また、気軽に記録と発信ができるようになったからこそ、どのよう

に伝えるのがもっと重要で、それには表現の問題が関わってくるはず。その試行錯誤と実践をしていくことが後世に遺すための鍵なのではないかと思っています。

せんだいメディアテークで東日本大震災の市民による記録活動をサポートする事業「3がつ11にちをわすれないためにセンター」を担当して、半年がたった2011年11月に、中越のメモリアル施設をはじめて見ました。そこで特に感動したのが、山古志の木籠地区と郷見庵です。ここは、現地の遺構が残っていて、そのすぐそばに住む場所と郷見庵があり、その場所では1階で商いを、2階に資料室がありました。その資料室では、さまざまな人がいろいろな時代につくった資料が、例えば、震災前の写真、震災直後からの新聞、復興計画の模型とか地図とか多様なメディアを使ったものが展示されていました。その資料からは、震災前、直後から現在まで、地域の歴史の連続性を知ることができ、震災の影響がどうだったかが一番伝わる場所だなと思いました。そして、その資料館が土地に住む人びとの手でつくられていたことに感動しました。そのため、郷見庵は、私たちがやろうとしている「草アーカイブ」のお手本だと勝手に思って、いままで東日本大震災の市民による記録活動を支える仕事をしていました。

上村：今、お話を聞いていたら、ほかのお話にいくのがもったいないので、松井さんに飛んでもいいですか。郷見庵が草アーカイブの原形だったそうですね。

松田：松井さんには「自分の家が傷んでいく様がある意味見せ物になっているということをどのように整理していらっしゃるのか。また、周囲の方はどうですか」というご質問がきています。

松井：最初はやはり保存するかしないかという分かれ道になりました。見るのもいや、もうそんな悲しいこと、思い出すのは嫌だと。でも、違うんだよ、私たちはこの震災を乗り越えて幸せな村を再生した、そういうところを見てほしい。なので、

伝えていくものは地震も大切だけれども、そこに住んでる人、村を復興させた、よみがえらせたその頑張りがあったから今の村がある、その人たちが絶対にこの未来に伝えていかなきゃいけない、そういう大事なものも忘れないでほしいなっていう思いです。なので、郷見庵っていうお店を、施設を建てて、お茶を飲んでもらって、地元のお母さんたちと、来てくれた人と震災のお話をして。こちらの水没家屋は震災からのとても悲しい出来事を語ってるんですよね。でも、村の中に入ってお茶を飲むスペースに来れば、優しくお母さんが包んでくれる。もうそれだけで私の心は平常心ではいられません。心に突き刺さるものがあるんだなって感じています。

悲しいお話で終わるんじゃなく、村を再生したすばらしい幸せな物語、ハッピーエンドで終わるんだよって、そんなことを山内さんも言っていましたけれども、ストーリーだったら伝わる。なので私たちは、村を再生させた悲しい結末じゃなくって幸せな結末だったんだよ、そこを見てほしい。郷見庵を運営して、楽しい人たちが集まって、太鼓をたたいたり、震災の感謝祭、復興祭などをして、自分たちが楽しむ。本当にそこにはお茶を飲む人もここにきて休む人も、別に何をかうわけでもなくただ寄ってくれる、そこには何一つ無意味なものはない。どれも、どの人も郷見庵に必要とされ、生きがいの場となり、みんなで村を創る、その場が郷見庵になっていると思います。

上村: つらかったですね。山古志の皆さん、山下りて、避難所行って、映像から流れてくるのは毎日毎日水深が上がっていく様子ですからね。冬になってもまた雪下ろしに行かなきゃいけないとかいってまさに命懸けでいったりして。

松井: 命懸け。でも、やっぱりみんなで行くからあれも楽しいんですよね。村に入れないうっていうような状態が3年続いて、で、許可証を持ってようやく村に入って。住めるか住めないかもわからない家を一生懸命雪掘りするんですよ、汗だらだらになって。でもみんな、ああ、山古志に来たっ

て、空気を吸えた、それだけで何かもう癒やされる。だから雪掘りの集合写真もみんな笑顔な、あり得ないですよ（笑）。

上村: この流れだから山崎さん、中越の話をしましょうか。お願いします。

山崎: 今、物語っていう話の流れでちょっと考えていたんですが、ずっと私もこの震災を伝えるうえでこういう施設があったり、震災遺構の保存をどうするかとか、いろんなやはりそういう問い合わせもいただいてきた中で、こういう施設があれば、全部完結してすべてが伝わるわけでもないですし、震災遺構があるからそれが全部伝わるわけでもなくて、それがどういう物語、ストーリーがあったのかっていうのが一緒にあるといいというお話がここまであったと思うんですね。じゃあそのストーリーはその施設や現場に看板で、文字で書かれていけばいいのかといたら、それもまた違って、それをちゃんとここはこういう場所でした、で、私たちはこういう幸せになるために今まで頑張ってきましたということを、松井さんのようにその場所で語ってくれる人がそこにいることも大事なんだなっていうのを、今日また改めて感じたところです。

上村: 糸子先生。何か思ったこと、何でも結構です。

北原: 松井さんがものすごい情熱で、時間かけてご自身の思いを述べられました。「思いが伝わる」ということで少し思い出したのだけれど、150年ほど前、天明3年に浅間の大噴火というのがありました。浅間大噴火は利根川にも洪水を呼び起こしたし、大変な災害なのですが、550人ほどいる村人の400人以上は、火砕流が起きて土砂が山肌を削ったその土石流に埋没して亡くなっちゃったんですが、たまたま外に出ていて助かった人が村には残りました。その人たち90人ぐらいは、例えば、夫を亡くした妻と妻を亡くした夫を組み合わせて、新しい家族を作り、子供を増やす、そうした形で村を再興するというのをやったんですね。

で、その人たちの何世代かあとの人が土砂災害を免れて残った観音堂にその体験談を伝えているんです。で、40年ぐらい前でですけども、行って、自分たちは村から出ることを禁じられていたと。ともかくこの村を残さなきゃいけない、守り抜かなければいけないというんですね。もう相当に年をとられたおじいさんたちですけども、すごく縛られたっていうお話をしたんですね。ものすごいびっくりして、そういうかたちでしか村は残らないのかなと思ったんですけども、その当初はもっと厳しい。でも、戦後になってですよ。戦後の昭和という時代でなくてもそういう伝承を守っているっていうか、外へ行く人もいたんでしょうけれども、災害に遭った村の人たちがそういうかたちでものすごい努力を強いられているのですね。松井さんは「楽しくなければ」と仰いました。その楽しいというのは外へ発信する、自分たちの内面の問題ですけども、そのおじいさんたちも自分たちの村を守るっていう誇りがあるからこそだと思えます。2つお話にギャップがあるようにおもわれますが、多分そうではなく、どちらも村を守るという意味でつながるんじゃないかなと思います、もう百何十年前のお話ですけどもね。

諏訪：学校教育の現場で僕がいつも言うのは、体験がなくても語れる、という話です。語り継ぐっていうのは「語る」と「継ぐ」という2つの動詞があるのだから、語った人の話を聞いて、自分の心が動いたら、その話と一緒に継いで自分の心の動きも加味して、次の人に伝えたい、それが語りを継ぐということです。語り継ぐというのは、何も体験を持った人が自分の体験を語るという絶滅危惧種の伝統芸能になってしまいそうな、そんなことではなく、聞いたものを継いでいくっていう作業だろうという話をしているんですね。語り継いでいる語りの中には、二つの意味があると思っていて、一つはその話を聞くことで社会の防災力が上がって、次の災害の中でこういう被害を減らすことができるという社会的な意味を持つ語り、もう1つは聞いた側が戸惑うことしかないような、けれど何か自分の気持ちがぐらぐら動

くような、そういう個人的な意味を持つ語りといえるのかな。学校教育ではやっぱり正解を与える、断定的にきちんと整理してくれる社会的な意味を持つ語りばかりが語られようとしているけれども、やっぱりそこで混乱をもたらしたり戸惑いをもたらしたり、全然整理のできない思いがずっと語られるような個人的な意味を持つ語りというのも、学校教育の中では残していかなきゃならないと考えると。

米山：私も施設や遺構のみで遺していくのは無理だと思います。こちらにも震災記念公園や野島断層保存館もあるので伝えていきやすいというのがありますが、やはり人がいないと残せません。実際に保存館には修学旅行などで小中高生がたくさん来てくれますけど、機械の案内音声のみで断層を見てもらったら、「ああ段差あるな」というくらいで本当にすぐ出てきますね。見学する前にたとえ10分でも震災の語り部を聞いてもらったときは、1時間ぐらいゆっくりかけて見てくれます。それと、私も諏訪先生と一緒に、体験しなくてもなんぼでも伝えられると思います。私も地震の10年後くらいから語り部を始めたのですが、そのころまでは本当に自分の体験談だけしゃべったらそれでOKでした。最近は目的意識を持って防災・減災学習に来られるお客さんが増えてきて、例えば自治会長さんの会で来られたら、「当時の自治会長って真っ先に何しよった?」とか、「民生委員は何やとった?」とかそんな質問が出てきます。自分は自治会長も民生委員も横から見ただけだったので、これではあかんと自分で聞き取りをしてファイルをつくりました。今はそれを伝えています。

崎山：山内さんがストーリーについて話されましたが、実は小学校の教科書に載った『稲むらの火』の原作になった、ラフカディオ・ハーン、小泉八雲作のリビングゴッドの物語は、実は明治30年に出版されました。その前年に起きた明治の三陸津波の被害の様子を外国人特派員グループが取材しており、小泉八雲がそのレポートと、誰から聞

いたかは今わかっていないのですが、安政時代の紀州広村で聞いた津波の時の濱口梧陵さんの行動、活躍を併せて書き上げた物語がリビングゴッドです。それを翻訳して、『稲むらの火』の物語にしたということで、小泉八雲は実は紀州には取材に行っておりませんので、原作に津波は「東の海から押し寄せてきた」という記述があります。紀伊半島はほとんどの海は西側にあります。このように、この物語には読んだら、どこにも紀州の話であるという記述はありません。ないのですが、私のところでは地元の話であるっていうことをずっと言い続けていまして。そういうことが一つ物語性としてあるっていうこともちょっとお知りいただけたらと思います。

樋口：私どもは、この自然災害を乗り越えて、この地を良くしようと努力をしてきた人たちの思いを遺そうとしています。ですが、大河津分水ができてからまもなく100年が経過し、その前に起きた水害からは200年も300年も経っています。そうした場合に使える情報は先人たちが書き残してくれた資料です。語りが大切なことはわかりますし、物体、物質を残すことが本来の目的じゃないですが、書物でも造形物でも形として遺すことはとても大切だと思っています。

北原：皆さんの本音というか、ご自身にかかわったかたちでのお話が展開されて、後半は真の芯にきましたね。樋口さんがあまりお話しにならなかったけれども、おそらく当時の技術を伝承する資料が残されているだろうと思うんですね。関東のほうでは関東大震災のときには既に着手していた荒川放水路が、地図で見ると真っ白なんです。とても太い状態で地図上にあるんですが、それは明治43年に利根川や隅田川も含めた大水害があって、荒川放水路の建設は関東大震災の前から進行していた。つまり、明治40年の大河津分水が建設されていた頃、国土を水害から守るという発想が国の中であつたのでしょうか、その人が具体的になす行為としての技術が、大河津分水には象徴的に遺されていると思います。技術で河川の洪水の

被害がどのように好転したかを知るのには重要ではないかという印象を持ちましたので、つけ加えさせていただきます。

松田：「草アーカイブ」の話が出ましたが、今日のみなさまの取り組みを見て、「草学び」といったものを感じました。大学を含む教育現場は、ある意味プロの学びを仕掛ける施設ですが、ご自身で動機を見つけて、人に話を聞いて、まとめて、さらに伝えるというのは学びのプロセスですね。この「草学び」のようなことが災害をきっかけに、どんなテーマであれ、それは土木技術であってもそうだし、人の生活であってもそうですけど、伝える営みというのがこういう施設で、色々な場所でされているのだと感じました。

上村：ありがとうございます。さて、ちょうど50年前に羽越水害がありました。9月1日の新潟日報の記事の一面で紹介されていますが、被災地の関川村で開かれている「大したもん蛇まつり」では水害発生の日に合わせて長さ82.8メートルの大蛇を村内の全54集落が手分けして作っているということです。村民の半数が羽越水害を知らない世代になっても、水害の記憶を風化させず伝えるために、村を挙げて祭りというかたちで伝えていく仕組み化をしているということです。これも、ゆかりの話掘り起こして「遺す」一つの例かなと思って紹介しました。今日はみなさま長い時間、おつき合いいただきました。ありがとうございました。

3. エクスカーション

「中越メモリアル回廊」を巡るエクスカーションにはフォーラムの登壇者や一般参加者など総勢21名が参加し、中越防災安全推進機構業務執行理事稲垣文彦さんと、パネリストでも登壇した松井智美さんの案内で、「やまこし復興交流館 おらたる」、「木籠メモリアルパーク」、「おぢや震災ミュージアム そなえ館」の3か所を訪ねた。参加者は棚田の美しい風景を楽しみつつ、中越地震の「遺し方」について銘々に考えを巡らせるひとときとなった。

